

暗号解読 日米開戦

志村 良知

昭和十六年十一月二六日午後（現地時間）、米國務長官コーデル・ハルは駐米日本大使野村吉三郎に主文十か条からなる文書を手渡した。冒頭に「一時的かつ拘束力は無い」と但し書きがあり、議会の承認も得ていないハル長官名の覚書であった。

後に日本ではハル・ノートと呼ばれることになるこの文書は、一縷の妥協点を探っていた日米交渉の過程を突如全て白紙に戻し、アメリカの外交原則を冷たく並べただけの衝撃的な内容だった。

最後の日米交渉の過程では日本の外交暗号は米国側に解読されていた。しかし、暗号電報の数は膨大、外務省と世界中の大使館が交わす、長文カタカナの難解な外交用語の奔流を選別し英訳できる日本語専門家は、暗号解読文書「マジック」作成スタッフに数人しかいなかった。

多数の意識や誤訳を含み、外交的修辭の部分は省略するか直截的な英語表現にされた生のままの「マジック」文書が、情報分析の専門家の整理を経ないで、政府高官に直接供された。

日本側の手の内を粗雑な英訳で読んでいた米高官は、思い込み合う部分だけ重要視し、合わない部分は絵空事の時間稼ぎと決めつけ、交渉中断の卓袱台返しに至った。

ハル・ノートは公式文書ではなかったが、非戦派で対米交渉の為に入閣していた東郷茂徳外相が「最後通牒」だとして開戦の責任を外相に留まって取る決意をするほどのインパクトがあった。

結局、十二月二日、すでにハワイに向かっていた連合艦隊に「新高山ノボレー二〇八」の電報が打たれる。

海軍の暗号も解読されており、ルーズベルトが真珠湾攻撃をやらせたという、真珠湾攻撃陰謀説も根強い。しかし、開戦の時点では海軍の作戦暗号は解読されていなかった。外務省は、海軍の作戦について知らされていなかったので「マジック」では海軍の動向や作戦のことは一切分からない。

米国による日本外交暗号解読は、望みがあったかもしれない交渉を中断する原因となり、真珠湾攻撃も防げなかったのだった。